編集後記

「人生百年時代」というけれど、光陰矢の如し。戦争、大地震。動きが目まぐるしすぎる。世界も心も荒れ果てている。そのなかで一人勝ちし、わがもの顔で巷を闊歩しているのが、AI。そんな世界の荒廃に未練はなし、とばかりに、この一年、多くのヒューマニストが世を去った。ロシア文学者である私にとって恩師といえば、いずれも『カラマーゾフの兄弟』の翻訳者である原卓也と江川卓のお二人。二〇〇〇年代前半に、いずれも七十四で亡くなられた。六十代半ば以降、二人は病との苦しい闘いを強いられた。その軽井沢友達でもあった文人、加賀乙彦と菅野昭正のお二人が、昨年、後を追うようにして世を去った。享年九十三。原、江川と異なり、加賀、菅野のお二人とも、死の直前まで健筆をふるい続けた。同時代を生きた文人たちのこの享年の開きは何を意味しているのか。彼らが精神の糧とした文化の違いが原因か。しかし一言、忘れられないのは、四人の恩師たちの驚くべき包容力と心遣い。今から十五年以上前、東京・神田のすずらん通りに並ぶロシア料理店で、私は加賀さんから唐突にアドバイスを受けた。「亀山君、君は作家になりたいのかい？　作家になるには、すべてを捨てなければだめだよ」。その教えに背くようにして、八年後、私は、長編小説の執筆に挑戦する。何ひとつ「捨てる」ことなく。自己評価でいえば、3。案の定、新聞評もあまり芳しくなかった。「人生百年」といえど、いずれは「すべてを捨て」るときが来る。その時、果たして私の脳は、新しい物語を生み出すだけの活力を備えているのか。むろん、その可能性はゼロに近い。それならば、別の道がある。読書に活路を求めるのだ。数年前、加賀さんの『永遠の都』全七冊を読み上げた私には自信がある。だから、いきいきと想像できる。人生の記憶と物語の夢とが、互いの境界線を譲り合って独自の宇宙を形づくっていくさまを。それこそが、老いの醍醐味というものではないか。初心に戻って、今春、本学出版会から出た『世界の長編小説四〇』を道しるべとしたい。

二〇二四（令和六）年三月　〈I・K〉

表紙作品

「メリーゴーラウンドの動物たち（孔雀）」SM（22.7×15.8cm）・テンペラ

水谷誠孝（みずたに のぶたか）名古屋学芸大学准教授、日本美術家連盟正会員。愛知県立芸術大学大学院修了。個展（渋谷東急本店、池袋東武、松坂屋名古屋店・静岡店、あべのハルカス近鉄本店）、グループ展（日本橋髙島屋、小田急新宿店、阪急うめだ本店、名古屋栄三越、日動画廊 他）、国展（国立新美術館・愛知県美術館）、大府市民栄誉賞（吉田沙保里）記念品制作。

Artes MUNDI

アルテス・ムンディ Vol. 9
2024年3月31日発行

■ 編集人
亀山郁夫　Kameyama Ikuo

■ 発行人
名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター
亀山郁夫　Kameyama Ikuo（センター長）

■ 発行所
名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター
〒470-0197　愛知県日進市岩崎町竹ノ山57
TEL. 0561-75-2164

■ 編　集
亀山郁夫（編集長）　Kameyama Ikuo
伊藤達也（Artes MUNDI 部門長）　Ito Tatsuya
梅垣昌子　Umegaki Masako
甲斐清高　Kai Kiyotaka
地田徹朗　Chida Tetsuro
西村木綿　Nishimura Yuu
小堀慎悟　Kobori Shingo

■ 編集協力
戸田　都　Toda Miyako
福壽佳音　Fukuju Kanon

■ 表紙
水谷誠孝（絵）　Mizutani Nobutaka
細野綾子（デザイン）　Hosono Ayako

■ 印刷所
株式会社荒川印刷

＊本誌に掲載されている記事、図版、写真等の無断掲載、複製、転載を禁じます。
© 名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター　2024年